**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６回　（２０１４年９月２日）**

**・第６回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(10)頁**

・📖（読むp(10)）**霊性の師としてのシュリー・ラーマクリシュナの特徴**

**それはさまざまな信仰の道を実践したことで得られた『至高実在』の悟りであり、ヴェーダやヴェーダーンタなどの聖典が証言している霊的経験さえぐものであった。 ご自身が歩まれた道であったから、どの信仰の道に関しても微細に渡ってご存じだった。だからあらゆるタイプの求道者が直面する問題をやすやすと見きわめ、効果的に解決された。そのうえ、異なるさまざまな道の実践者たちが、各自の理想神の完全なわれをシュリー・ラーマクリシュナの中に拝したのだった。**

（解説）

1. 「さまざまな信仰の道」の目的

　・**ヴェーダーンタの目的**は、ジーヴァ（Jiva　個人的アートマン）とブラフマンがひとつになること。

　・**ヨーギーの目的**は２つあり、ひとつは、ジヴァートマン（jivātman　自分のアートマン）とパラマートマン（Paramātman　偉大なアートマン）がひとつになること。（**＊**ヨーギーは「ブラフマン」という言葉で表現せず、「パラマートマン」と言う言葉で表現する）

　もうひとつは、クンダリニーの上昇（クンダリニー・ヨガ）。クンダリニーとは、脊柱の最下端のチャクラ（霊的エネルギーのセンター）に「ヘビ」の形でねむる、霊的エネルギー（シャクティ）のことで、ヨーギーは、脊柱の最下端から次々に上のチャクラを通って、頭の上のサハスラーラ（シヴァの場所と言われる）に上昇させようとする。

　・**タントラの目的**も、シヴァ（至高の意識）とシャクティ（霊的エネルギー）の合一。

（**＊＊**このとき、“タントラとヨーギーの類似点と相違点”についてもお話がありました。このレポートの最後に付記しています）

・**プゥラーナ（聖典のひとつ）の道**。プゥラーナ（クリシュナを中心にしたヒンドゥ神話）の方法で実践する人の道は、**ヴィシュヌ派**と似ています。目的は、クリシュナのヴィジョンを得ること。

1. **サッチダーナンダ・シヴァ**

**サッチダーナンダ・ブラフマン**

**サッチダーナンダ・クリシュナ**

これらは、**ヒンドゥ教の大きな３つの方法**です。

すなわち、

**・サッチダーナンダ・シヴァはタントラ**。タントラの考えでは、サッチダーナンダはシヴァだから。

**・サッチダーナンダ・ブラフマンは、ヴェーダーンタ**。ヴェーダーンタの考えでは、サッチダーナンダはブラフマンだから。

**・サッチダーナンダ・クリシュナは、ヴィシュヌ派とプゥラーナの道**。ヴィシュヌ派とプゥラーナの考えで、サッチダーナンダはクリシュナだから。

1. ふつうの目的

（②を指して）それが普通の目的です。

ヴィシュヌ派は、クリシュナのヴィジョンを得ると目的に着く。

ヴェーダーンタは、ブラフマンを悟ると目的に着く。

ヨーギーとタントラの信者たちは、サハスラーラにシヴァがいる、そこまで行くと、目的に出る。

もちろんみな、「サッチダーナンダ」という同じ目的に行きます。ただ、最初の方法が、別々なのです。

「サッチダーナンダ」のいろいろな姿が「ブラフマン」と「クリシュナ」と「シヴァ」。ですから、目的に着くと本性はみな同じなのですが、それぞれの、最初の道は違いますから、それぞれの考えで、「我々の霊的な目的はブラフマンです」とか「我々の霊的な目的はシヴァです」とか、「クリシュナです」とか、別々になる。

1. シュリー・ラーマクリシュナの特徴

ラーマクリシュナは、何が違いますか？

ヴィシュヌ派の霊的な目的はクリシュナですね？

ラーマクリシュナはクリシュナのヴィジョンを得ました。

タントラの霊的な目的はシヴァですね？

ラーマクリシュナはタントラの方法でシヴァも悟りました。

ヴェーダーンタの霊的な目的はブラフマンです。

ラーマクリシュナはブラフマンも悟りました。

それぞれの道の霊的な目的を、ラーマクリシュナは、みな、自分で見ることができました。これがおもしろいこと。

たとえば、ヴィシュヌ派の道を通って悟った人がいるとします。するとヴィシュヌ派の信者たちは、その人の中に自分の霊的な目的を見ることができますけれども、ヴェーダーンタの実践者は、その人の中に自分の霊的な目的を見ることはできません。

シュリー・ラーマクリシュナは、全部の道のさまざまな方法を実践して悟ったので、さまざまな道の求道者が、自分の個人的な霊的目的を、シュリー・ラーマクリシュナの中に見ることが出来ました。自分の方法の最高を、ラーマクリシュナの中に見つけることが出来たのです。

その上、ヒンドゥ教だけではなく、イスラム教の信者も、シュリー・ラーマクリシュナの中に自分が選んだ神様、アッラーを見ました。

皆さんがあまり知らない話を紹介しましょう。ある信者の回想録からのお話。

コルカタの北部に、イスラム教の礼拝施設モスクがありました。あるとき、そのモスクでファキール（イスラム教でいうお坊さんのような存在。家族を持たず、霊的な実践をしている）が、心から神に憧れて、「アッラー、アッラー、ペアレアジャウ（Oh Lord Please come, please come.）愛する師よ、おいでください、おいでください」と声に出して、泣きながら祈っていました。ちょうどそのときラーマクリシュナは馬車で通りかかり、ファキールの声をきいて、馬車から降り、走っていってファキールを抱きしめました。回想録を書いた信者は別の道からそのシーンを見て、印象に残って、書きとめました。

また、まだ英語に訳されていませんが、イスラム教の信者が書いたシュリー・ラーマクリシュナの回想録もあります。シュリー・ラーマクリシュナには、田舎のカマルプクルの近くやドッキネッショル近辺にイスラム教の信者も多くいて、彼らはラーマクリシュナのことをとっても尊敬していました。イスラム教の考えではモハンマドはプロフェット（預言者）ですが、彼らはシュリー・ラーマクリシュナもモハンマドと同じ預言者だと考えた。ふつう、イスラム教は、アッラーのほかに預言者がいるなどとは考えない。ましてや、シュリー・ラーマクリシュナは他の宗教の聖者ですけれども、彼らはそんな感じでラーマクリシュナを見ていました。

今度はキリスト教徒の例。彼はミスラという名前。『福音』にも出てきます。（👉『福音』p1010）その人は北インドのヒンドゥ教徒でしたが、のちにキリスト教徒になった人、そしてラーマクリシュナの中にイエスを見た人です。あるとき、誰かから『イエスが、新しい形で神様として現れた』と聞いて、ミスラはその方をあちこち探しました。探して探して、最後にコルカタに来て、ラーマクリシュナに会えました。そして喜んで、エクスタシーに入り、とっても泣いていました。あとになって、ミスラはラーマクリシュナの信者に言いました、「あなた、知りませんか？　ラーマクリシュナ、本当はイエスの化身です」と。

こうして、さまざまな道の信仰者が、自分の霊的な目的をシュリー・ラーマクリシュナに見つけました。

・📖（つづきを読む）**師は、明らかに相反する哲学的見解や信仰でさえ調和させる、普遍の教えと包容力をお持ちだった。そして悩める者への深い慈愛、肯定的な態度、鋭い観察力で、ときには例え話や逸話をひきながら、軽妙な身振りで明快に説明し、最後には論点を彼らに理解させられた。人間の性質を深く理解するからこそ、霊性の師として、各々の信者の素地、態度、能力に応じて指示なさることができた。さらには単純素朴きわまりない子供のような性質と、まったくの無私の性質、激しい放棄、純粋さ、誠実さ、遊び心、甘い声、さらに甘くとろける歌と踊り、そして最高に甘美な微笑みが、師を魅力あふれる個性豊かな指導者にしていた。これを写真でとらえつくすことはとうていできない。師はひたすら甘美な存在であり、訪問者に惜しげもなくふりまかれる浄らかなびの権化そのものであった。**

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナの特徴はまだあります。

普遍的、困った人への慈悲、肯定的、強力な観察力・・・そして、さまざまな引用（例）をひき、物語を使う・・・これがとても上手でしたね。ジェスチャーやポーズも上手。また、とても難解なものを簡単な方法で説明する力が、ラーマクリシュナにはいっぱいありました。そして人間の性格がよくわかっていた。そのうえで、人びとの経歴や生い立ち、性格、好みを考えて、個人個人にそれぞれ異なる最適な助言を与えました。ひとはそれぞれ力も別、考えも別、態度も別、好きなもの別でしょう？　このようにラーマクリシュナの教えは、各自にとって、とても実践的だったのです。

ラーマクリシュナの教えがいかに効果的だったか。その例をいくつかお話しましょう。

ラーマクリシュナは、**人びとの日々の経験があるものの例をつかって、説明**をしました。そして**ジェスチャーやポーズを交えてその印象を深く**しました。これがとっても**効果的**だったのです。そして（あとでまたお話しますが）もうひとつ、**個人に合わせた教え**をしたということ。

ひとつの例。

“ブラフマンの中にマーヤーはあるが、ブラフマンにはマーヤーの否定的な影響は何もない”というブラフマンとマーヤーの関係を、ラーマクリシュナはどのように説明したでしょうか？　そう、ヘビ。“**ヘビの中には毒があるが、ヘビには毒の影響はない**”──とてもわかりやすいでしょ？

別の例。

“ブラフマンとシャクティ”“ブラフマンとマーヤー”の関係を、「火」（＝ブラフマン）と「火の熱と火の光」（＝シャクティ、マーヤー）のアイデアで説明した。もちろん、「火」と「火の熱と火の光」は別々のアイデアですが、**「火」から「火の熱と火の光」を分けることはできない**でしょう？　これと同じように、ブラフマンとシャクティは、（別々のアイデアでもあるが）分けることはできない。すなわち、“同じものの二つの姿”みたいです。

もうひとつの例。

サーンキヤ（哲学）で言う、“プルシャとプラクリティ”についてです。サーンキヤによると、

・プルシャ（意識）は動かない、何もしない。

・プラクリティ（エネルギー）はいつも動いています。

・プルシャは（ひとりでは）動かない、自分だけで働くことはできない。

・プラクリティは、プルシャがいないと、働きはできない。

これを、ラーマクリシュナはどんな例を使って説明していますか？──**“結婚のセレモニーを準備しているある家族”**です──旦那さんは座っているだけ。奥さんがいろいろ準備をしています。奥さんはときどき旦那さんのところに行って、「私はこうしたい、ああしたい」と言います。旦那さんは「はい、はい」と返事だけ。何も仕事してない。すべての仕事は奥さんがしています。しかし奥さんは、旦那さんがいないと（指示や了解がないと）、何も出来ないみたいです。奥さんには旦那さんの存在が必要です。つまり**旦那さんはサーンキヤのプルシャ、奥さんはプラクリティ**。

この話をジェスチャーやポーズを交えながら話しました。若い信者たちは皆笑いました。哲学のこんなに難しい話をそんなに簡単に説明。それも特別な力でしょう？

もちろん、ラーマクリシュナには、悟りという自分の経験がありました。しかし悟りだけでは、このような説明はできませんでしょう？

悟った人はほかにもいました。しかし、ラーマクリシュナのように簡単に説明することはできない。ラーマクリシュナは説明する力も特別でした。身近にあるふつうの例をつかって。

なぜラーマクリシュナにはそれができたのか？　──**観察**です。

また別の例。

霊的実践をして少し神様のことがわかっても、すぐ無知（マーヤー）に戻ってしまう。少し瞑想して勉強して、真理のアイデアがあらわれるけれども、すぐマーヤーに戻ってしまう。この状況をラーマクリシュナはなにに例えましたか？　──**田舎の池の水草**。

その田舎の池は、たくさんの水草（）でおおわれていて、水が全然見えません。あなたはそこに行って、手で水草をどけます。あなたは水を見ることができました。でも自然にすぐにまた、水面は水草でおおわれてしまいます。わかりやすいでしょう？

難しい哲学のアイデアもこのように説明すればよくわかります。

次は、**個人に合わせた教えをした例**。

ある信者は心がとてもソフトでした。ソフトな感情もよいですが、しかしその傾向が強すぎると悪い目的を持った人にだまされたり、いいように使われる可能性もあります。それに感情的過ぎるのもよくない。また、慈悲もいいですが、どのような状況で慈悲が必要なのか、その識別も必要です。悪い残酷な人のために慈悲はいらないでしょう？　子どもが悪い態度のとき、両親がソフトでは、その子は良くはならないです。

別の信者はそれの反対でした、心がとっても厳しい。石みたい。（笑い）それも、信者のためにあまりよくありません。

たとえば、ヨガ―ナンダジ（シュリー・ラーマクリシュナの直弟子の一人）の心はとてもソフトでした。あるときヨガ―ナンダジは、ラーマクリシュナに言われました、「あなたのベッドに虫がいたときは、その虫を殺してください」と。でも、ヨガ―ナンダジはソフトだったから殺さなった。虫を殺さなかったことを聞いて、ラーマクリシュナは「私の助言に１００パーセント従ってください。自分の考えで変化しないでください」と言いました。ヨガーナンダジは、そのような命令をされるとは全く考えていなかった。なぜなら、普通の信者は、「殺さない」「非暴力」の考えでしょう？　しかし、この場合の目的は、ヨガーナンダジのソフト過ぎる心を直したかった。そうしないと、誘惑に誘われた時、問題が出る可能性があるからです。これがラーマクリシュナのトレーニングです。

また、（覚えていますね？）ニランジャナーナンダジが舟に乗っているとき、ある人がラーマクリシュナの批判をした。ニランジャナーナンダジはその人たちに、「批判しないでください」と頼んだけれども、誰もきいてくれませんでした。そうしたら、ニランジャナーナンダジはとっても怒って、立ち上がって、舟をわざと左右に揺らした。（マハーラージのジェスチャー。笑い）みんなは舟が沈むのが怖いので、「わかりました」と言って、批判をやめました。

ラーマクリシュナはそれを聞いてなんと言いましたか？　どうしてあなたはそこまでしましたか？　批判をしてない人も乗っていたし、船頭さんもいます。舟が沈んだらとても困ります。そう言って、とてもった。そこまでの強い怒りは良くありません、怒りのコントロールが必要です、と。

ヨガ―ナンダジもこれと同じ状況に出会いました、誰かがラーマクリシュナを批判している状況に。でもヨガ―ナンダジは（心が弱いのではない）ソフトでしたから、他の人が批判しても何も言わなかった。我慢していました。ラーマクリシュナはその話を聞いて、ヨガ―ナンダジに「どうしてあなたは我慢しましたか？」と言いました。なぜなら、グル（霊性の師。ヨガ―ナンダジにとってはシュリー・ラーマクリシュナ）を批判する人には、「やめてください」ということはもちろん、もし、その人が批判をやめないのなら、その人を殺してもよい、と聖典の中に助言があるほどなのです。もちろんそこまでしませんが、グルの批判には、絶対、反対したほうがいい。もしくは、少なくともその場所から離れて、別の場所に行く。グルの批判を聞くことは、絶対によくないことなのです。

このように、同じ状況で、まったく違う助言がラーマクリシュナから出ています。

ニランジャナーナンダはとても怒りっぽかったから「あなた我慢」の助言、ヨガーナンダジはとてもソフトでしたから、その反対の助言。

ケースバイケースではないですか？　目的は、進むです。ある人はその人の性格のうちの、その問題、別の人は別の性格で別の問題。だから直す方法も別々です。

こうして各自に合わせた教えをラーマクリシュナはしました。ふつうのグルはそうではないし、そこまでわからない。シュリー・ラーマクリシュナは、ケースバイケース。人の性格をよく観察して、その人の何が問題で、何が欠点かをよく見て観察して、そしてそれを直すために効果的な助言をしていました。

このようにシュリー・ラーマクリシュナのトレーニングは、とっても**効果的**でした。悟ったということだけではなく、グルになるにはそのような姿勢も、とても大切ですね。これがポイントです。

**付記１＊＊＜タントラとヨーギーの類似点と相違点＞**

タントラとヨーギーは、クンダリニー（霊的エネルギー）やチャクラ（エネルギーのセンター）だけについていえば、類似点は多いです。双方とも、チャクラの瞑想をして、（脊柱の最下端にねむるクンダリニーを頭の上のサハスラーラ、すなわちシヴァの場所まで上げて）霊的な経験を得ようとします。

ただし、タントラではつねに、“シヴァとシャクティ”や“シヴァとマザー・カーリー”のイメージを使い実践しますが、伝統的なヨーギーは、シヴァやシャクティという言葉は使わず“パラマートマン”と言います。

しかし、実践的なことになってくると異なります。

タントラでは“いものの中にもマザー・カーリーがいる”と考えて実践をします。が、ヨーギーはその実践はしません。ヨーガは瞑想だけですが、タントラはそれだけではないのです。

たとえば「パンチャ・マー」。これは、お酒を飲んで瞑想する実践ですが、ヨーギーはこのようなことはしません。

（参加者より）「墓場で瞑想するのもタントラですか？」

そうです。でもヨーギーはそれもしない。ヨーギーは、食事や飲み物に関してはとても厳しい。何を飲むか、何を食べるか、どのくらい食べるか、何時に食べるかなどです。でも、タントラはそうではありません。タントラは、“世俗的な楽しみを使って”霊的な目的に上がろうとするのです。タントラは言います、「（修行の）最初から世俗的なものを放棄する必要はない」と。ヨーガは言います、「世俗的な楽しみを避けてください」と。

**付記２＊＊＜プラーナ―ヤーマ（呼吸法。または呼吸を使った瞑想法）の説明と注意点＞**

（タントラでもヨーガでも）チャクラの瞑想があります。その瞑想ではプラーナ―ヤーマ（呼吸法、呼吸の制御）を扱います。

呼吸には３つの過程があります。それらは、息を“吸う　**プーラカ**” “吐く　**レーチャカ**”そして“保持する（中でつ）**クンバカ**”。

1. 息を吸う・吐くだけのプラーナ―ヤーマは、身体のためにも良いです。

②　ヨーガ（とタントラ）の修行として絶対に必要なのは、クンバカ。クンバカの時、瞑想をし、マントラを唱えるからです。クンバカはふつうの人は、５秒か１０秒しか続きません。実践を重ねて５分、１０分、３０分ととめることが出来るようになり、瞑想できるようになります。呼吸を保持して、あるチャクラに心を集中しマントラを唱え、そのチャクラを瞑想する──これは簡単ではない、とっても大変です。そしてとっても危ないです。いろいろなことをコントロール（制御）しないと病気になります。先生から学ばないと危ないです。

（これはまた別の話ですが、呼吸法に）システムあります。左の鼻から４秒で吸って、１６秒とめて、右の鼻に８秒かけて吐く、というやり方です。

プラーナ―ヤーマは、ヨーギーが目的に向かうために行う実践法（②）であり、また身体のための行法(①)です。

（『福音』勉強会第６回、以上）